人 類 學 雜 誌

第四十六卷 第五附錄 昭和六年三月

樺太アイヌ人骨の人類學的研究

第四部 樺太アイヌ人四肢管狀骨横斷面の人類學的研究

第一篇 上肢骨横斷面の研究

Anthropologische Untersuchungen über das Skelett der Sachalin-Aino.

IV. Teil Querschnittformen der Röhrenknochen der Extremitäten der Sachalin-Aino.

Nr. 1. Querschnittformen der Oberextremitätenknochen. Von Masanori Seki.

京都帝國大學醫學部病理學教室

關 政 則

内 容 目 次

緒 言	第五章 掌 骨
第一章 鎖 骨	結 論
第二章 上 膊 骨	主 要 文 献
第三章 桡 骨	圖 版
第四章 尺 骨	

緒 言

大正十三年の夏清野博士は樺太東海岸榮濱郡榮濱村魯禮に於いて五十二體（男二十三體、女二十體、小兒九體）の現代樺太アイヌ人骨を採集せられ（清野謙次、日本人の研究、東京、大正十四年、二）平井博士は此材料に基き現代樺太アイヌ人頭蓋骨の人類學的研究を發表せられた（平井隆、樺太アイヌ人々骨の人類學的研究第一部頭蓋骨の研究、人類學雜誌、第四十二卷）。續いて余は本材料中四肢骨の人類學的研究に従事し、上肢骨、下肢骨、足趾骨の三部門に分つて之が成果を發表した（關政則、樺太アイヌ人々骨の人類學的研究、第二部上肢骨の研究、第三部下肢骨の研究、第四部足趾骨の研究、人類學雜誌第四十五卷、第七、第九、第十附錄、昭和五年）。又喜々津及び余は樺太アイヌ人肋骨の研究を完成して最近之を發表した（喜々津泰胤、樺太アイヌ人々骨の人類學的研究、肋骨の研究、人類學雜誌第四十六卷、第三附錄、昭和六年二月）。最後に余は宮本博士の現代日本人管狀骨の横斷面の人類學的研究（文献の部參照）に従ひ、樺太アイヌ人四肢管狀骨横斷面の形態に就いて若干の人類學的考察を試みんと欲する。

抑も管狀骨の横斷面の人類學的研究は Hrdlička に始り、Fischer 之れを前膊二骨の研究に利用して成果を擧げた。之れより本研究の効果は一般に認められるに至り、次で宮本博士は現代日本人管狀骨の全般に渡つて詳細なる研究を遂げられた。而して從來行はれたる管狀骨横斷面圖作成の方法は數種を擧げ

得る。

(一) 小金井博士の齒科醫用 Stenz 法。(Koganei, Y. Ueber die in dem Japanischen Muschelhügel Gefundenen-Skelette. Mitteil. d. Medizin, Fakult. in Tokio. Bd. 4. S. 1239. 1888参照)

(二) 足立博士が眼窠内型に用ひられたる寒天法。(Adachi, B. Die Orbita und die Hauptmasse des Schädels der Japaner und die Methode der Orbital messung, Zeitschrift, f. Morph. u. Anthropologie. Bd. 7. S. 379. 1904参照)

(三) Fischer の黄臘石膏法。(Fischer, E. Die Variationen an Radius und Ulna des Menschen. Zeitschrift für Morphologie und Anthropologie. Bd. 9. S. 147. 1906参照)

等は之れである。宮本博士は以上の内第二の足立博士法を用ひ、鈴木、長谷部博士以來他の多くの人骨計測者は小金井博士の第一方法を用ひてゐる。余も亦本研究に當りて此第一法を使用する事の簡便なるを知つたので之れに依る事にした。予が之の目的の爲めに使用した模型材料は米國デトロイト市 Detroit Dental Manufacturing Co. 發賣の齒科醫用グツタベルカ(商標KERR)である。之を溫湯にて適度に熱し、柔軟なる護模様の物となりたるとき、所要骨幹部に帶狀に緊密に纏絡し、その冷却して硬度を増すに至り、骨幹部横斷面上に於て之れを切截し、同時に之を直角の方向にて二個の縦割を入れる。而して之れが完全に常溫に復し特有の硬度を有するに至つて之れを骨幹より離し、相應する縦割面を合せて茲に横割面上に完全なる横斷面陰像を得る。之れを紙上に移すには該横斷面上に印肉を塗り薄き製圖用紙上に壓捺する。かくして得たる印影より輪劃を得るために、同紙上に更に製圖用紙を重ね硝子板上に置き、透過光線によりて之れを寫す。余は以上の方法により次の諸骨部の横斷面圖を得た。

鎖骨中央部

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} r \ 18 \\ l \ 16 \end{array} \right\} 34 \\ \text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 5 \\ l \ 8 \end{array} \right\} 13 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 47 \text{個}$$

上膊骨中央部

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} r \ 21 \\ l \ 20 \end{array} \right\} 41 \\ \text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 12 \\ l \ 12 \end{array} \right\} 24 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 65 \text{個}$$

橈骨々間櫛最強部

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} r \ 14 \\ l \ 15 \end{array} \right\} 29 \\ \text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 13 \\ l \ 11 \end{array} \right\} 24 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 53 \text{個}$$

尺骨上部(橈骨截痕直下部)

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} r \ 14 \\ l \ 16 \end{array} \right\} 30 \\ \text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 12 \\ l \ 11 \end{array} \right\} 23 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 53 \text{個}$$

尺骨々間櫛最強部

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} r \ 14 \\ l \ 16 \end{array} \right\} 30 \\ \text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 12 \\ l \ 12 \end{array} \right\} 24 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 54 \text{個}$$

尺骨中央部

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} r \ 12 \\ l \ 11 \end{array} \right\} 23 \\ \text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 9 \\ l \ 9 \end{array} \right\} 18 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 41 \text{個}$$

掌骨中央部

$$\begin{array}{l} \text{♂} \left\{ \begin{array}{l} \text{I. II. III. IV. V.} \\ r \ 8 \ 6 \ 6 \ 7 \ 6 \\ l \ 4 \ 6 \ 5 \ 6 \ 4 \end{array} \right\} \begin{array}{l} 33 \\ 25 \end{array} \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 58$$

$$\text{♀} \left\{ \begin{array}{l} r \ 2 \ 4 \ 5 \ 5 \ 5 \\ l \ 2 \ 4 \ 5 \ 3 \ 4 \end{array} \right\} \begin{array}{l} 21 \\ 18 \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{♂} \\ \text{♀} \end{array}} \right\} 39$$

下 肢 骨

大腿骨小轉子下3—5纏部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & 20 \\ l & 20 \end{matrix} \right\} 40 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & 11 \\ l & 11 \end{matrix} \right\} 22 \end{matrix} \Bigg\} 62$$

大腿骨粗縫線最強部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & 20 \\ l & 20 \end{matrix} \right\} 40 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & 11 \\ l & 12 \end{matrix} \right\} 23 \end{matrix} \Bigg\} 63$$

大腿骨髁間上部約1/2上部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & 17 \\ l & 15 \end{matrix} \right\} 32 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & 9 \\ l & 9 \end{matrix} \right\} 18 \end{matrix} \Bigg\} 50$$

脛骨栄養孔穿入部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & 15 \\ l & 16 \end{matrix} \right\} 31 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & 9 \\ l & 10 \end{matrix} \right\} 19 \end{matrix} \Bigg\} 50$$

脛骨中央部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & 14 \\ l & 17 \end{matrix} \right\} 31 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & 10 \\ l & 11 \end{matrix} \right\} 21 \end{matrix} \Bigg\} 52$$

腓骨中央部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & 11 \\ l & 10 \end{matrix} \right\} 21 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & 9 \\ l & 8 \end{matrix} \right\} 17 \end{matrix} \Bigg\} 38$$

臑骨中央部

$$\begin{matrix} \text{♂} \left\{ \begin{matrix} r & \begin{matrix} \text{I.} & \text{II.} & \text{III.} & \text{IV.} & \text{V.} \\ 8 & 11 & 8 & 9 & 6 \end{matrix} \\ l & 11 & 12 & 11 & 9 & 7 \end{matrix} \right\} \begin{matrix} 42 \\ 50 \end{matrix} \Bigg\} 92 \\ \text{♀} \left\{ \begin{matrix} r & \begin{matrix} 5 & 5 & 5 & 5 & 4 \end{matrix} \\ l & 5 & 4 & 4 & 4 & 4 \end{matrix} \right\} \begin{matrix} 24 \\ 21 \end{matrix} \Bigg\} 45 \end{matrix}$$

以上の諸骨の所屬番號は圖版中挿入せる通りである。但し是等は凡て清野博士所藏の人骨番號である。以下右の各骨に就いて所見を誌し、他人種との比較を試みる事にしやう。

上 肢 骨

第 一 章 鎖 骨

鎖骨中央部横断面像の變化多きことは宮本博士の認めた通りである。之れを同博士に従ひ(Ⅰ)、卵圓形 Oval (宮本氏、現代日本人第一圖版 ♂第2號、♀第13號)、(Ⅱ)、橫橢圓形 Querelliptisch (同♂第27號、♀第8號)、(Ⅲ)、圓形 Rundlich (同♂第28號、第29號) 及び(Ⅳ)、不規則型 Unregelmässig の四型に分類して頻度を求めると第一表の如き結果が出る。

第 一 表

	n	I	II	III	IV
♂ $\left\{ \begin{matrix} r \\ l \end{matrix} \right\}$	18 16	7 7	2 1	1 0	8 8
♀ $\left\{ \begin{matrix} r \\ l \end{matrix} \right\}$	5 8	1 4	1 1	0 0	3 3

即ち兩性を通じて不規則型最も多く、之れに次いで卵圓型が頻度大、圓型は頻度最小にて男性右側(第632號)に一例之れを見るのみである。之れを宮本博士の成績と比較するに(第二表)現代日本人鎖骨に於ては、男性にては頻度の順位之れと同一關係なるも、女性にては橫橢圓型最大頻度を占め、不規則型之れにつぐ、ために全體としては不規則型、橫橢圓型、卵圓型、圓型の順位となり、第二位第三位の順序は兩人種間にて反對となる。次に各型の頻度を比較するに、樺太アイヌ人は現代日本人に比して第一型、第四型の頻度著しく大、第二、第三型の頻度著しく小である。女性に圓型を缺ぐ事は兩人種間に共通である。

樺太アイヌ人材料左右間には著差を見ない。ことに現代日本人に於ける圓型の頻度の左右差の如き事實はこれを認め難い。

第二表

	n	I	II	III	IV
♂ { 樺 日	34 61	14 16	3 13	1 12	16 20
♀ { //	13 40	5 4	2 21	0 0	6 15
r { //	23 52	8 9	3 15	1 10	11 18
l { //	24 50	11 11	2 19	0 2	11 18
T { //	47 101	19 20	5 34	1 12	22 35

號、♀第15號)、(II)、楔狀型 Zapfenform (同♂第14號、♀第18號)、(III)、右兩型中間型 Zwischenform (同♂第9號、♀第1號)、(IV)、半月型 Halbmondform (同♂第24號、♀第8號) 及び(V)、不規則型に分類してその出現数を示すと第三表の如くなる。

第三表

	n	I	II	III	IV	V
♂ { r l	21 20	9 9	6 6	4 2	1 1	1 2
♀ { r l	12 12	3 1	7 7	2 4	0 0	0 0

規則型、半月型の順序に頻度高く左右間に於いては著差を見ない。以上の諸點は第四表に見るが如く宮本博士の現代日本人材料に於けると共通の現象を語るものであつて、上膊骨中央部横断面像については是等二人種の間に大差を認め難い。但し現代日本人に比し中間型は樺太アイヌ人に比較的頻度多く、之に反して半圓型横断面圖の頻度は現代日本人に比し樺太アイヌ人上膊骨に稍々小である。宮本博士によれば本型は橈骨神經溝の發育強く上膊骨外稜の鈍なるものを表示すと云ふ。

第四表

	n	I	II	III	IV	V
♂ { 樺 日	41 60	18 23	12 15	6 12	2 8	3 2
♀ { //	24 40	4 9	14 26	6 2	0 3	0 0
r { //	33 50	12 17	13 20	6 7	1 5	1 1
l { //	32 50	10 15	13 21	6 7	1 6	2 1
T { //	65 100	22 32	26 41	12 14	2 11	3 2

第二章 上 膊 骨

上膊骨中央部横断面は通常三角筋粗嚢部下端より數耗上方に來ること多く、ために該粗嚢及び橈骨神經溝の發育強き男性上膊骨と是等諸部の發育弱き女性上膊骨との間には本横断面像に著差を生ずる。之れは已に宮本博士の現代日本人々骨に於いて認めた所である。今本材料を宮本博士の五型(I)、Abgerundet Viereckig 即ち鈍四角型(宮本氏、現代日本人 第二圖版♂ 第21

即ち男性に於ては鈍四角型最も多く、楔狀型之れにつき、兩者の中間型、不規則型、半月型の順序にて頻度が小となる、然るに女性に於ては楔狀型最大頻度を取り、中間型之れにつき、鈍四角型は第三位に落ち、他の二型は之れを見ない。ために全體としては楔狀型、鈍四角型、中間型、不

第三章 橈 骨

橈骨々體は Hrdlička によれば三稜體を原形となすも、或は外側面に鈍稜を生じ、或は前側面陷凹、外稜の鈍磨等によりて諸種の變化を生ずると云ふ。Fischer も亦この説に賛意を表した。即ち橈骨々間櫛最強部横断面形は當然内方に長き三角形を原形となし、外縁膨滿、前縁陷凹等の變化を蒙るものが多い。宮本博士は是等の諸變化を(I)、栗實狀 Kastanienform (宮本氏現代日本人第三圖版

♂第29號、♀第6號)、(Ⅱ)、瓶子狀 Kolbenform (同♂第13號、♀第17號)、(Ⅲ)、三角形 Prismatische Form (同♂第17號、♀第3號) 及び(Ⅳ)、不規則型の四型に分類して現代日本人橈骨に於ける頻度を索めた。予が材料に就いて是等四型の頻度を見るに第五表の如くなる。

第 五 表

	n	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
♂ $\left\{ \begin{array}{l} r \\ l \end{array} \right.$	14 15	5 5	1 5	8 5	0 0
♀ $\left\{ \begin{array}{l} r \\ l \end{array} \right.$	13 11	3 1	3 6	7 4	0 0

るのみである。不規則型は本材料中1例も認めない。之れを宮本博士の現代日本人々骨と比較するに(第六表参照)栗實狀型の男性及右側に、又瓶子狀型の女性及左側に比較的大なる傾向を有する點に於いて、兩人種間に共通の現象を示す。各場合を通じて樺太アイヌ人は現代日本人よりも原始型なる三角型の頻度の比較的大なる點は注目し値する。

第 六 表

	n	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
♂ $\left\{ \begin{array}{l} \text{樺} \\ \text{日} \end{array} \right.$	29 60	10 23	6 13	13 16	0 3
♀ $\left\{ \begin{array}{l} \text{〃} \\ \text{〃} \end{array} \right.$	24 40	4 13	9 17	11 7	0 4
r $\left\{ \begin{array}{l} \text{〃} \\ \text{〃} \end{array} \right.$	27 50	8 21	4 12	15 15	0 3
l $\left\{ \begin{array}{l} \text{〃} \\ \text{〃} \end{array} \right.$	26 50	6 20	11 18	9 8	0 4
T $\left\{ \begin{array}{l} \text{〃} \\ \text{〃} \end{array} \right.$	53 101	14 41	5 30	24 23	0 7

である。

(Ⅱ)同♂第2號、♀第17號例に見るが如く、前縁甚だ廣く内縁は一樣に膨滿し後縁の鈍磨極めて強く、

第 七 表

	n	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	V
♂ $\left\{ \begin{array}{l} r \\ l \end{array} \right.$	14 16	7 7	2 4	2 4	3 1	0 0
♀ $\left\{ \begin{array}{l} r \\ l \end{array} \right.$	12 11	8 8	1 2	1 0	2 1	0 0

(Ⅴ)以上の諸型に當らざる不規則型。

今本材料については是等五型の頻度を求めると第七表の如き結果を得る。

即ち男女共に三角型最大頻度を占め、男性及び右側に於いては栗實狀、女性に於いては瓶子狀第二位に來る。然るに左側に於いては瓶子狀型最大頻度を示し、三角型之れに次ぐ。而して全體としては三角狀、瓶子狀、栗實狀の順位を取るも第二位と第三位との間には1例の差異がある。

第四章 尺 骨

1、尺骨上部(橈骨截痕直下)横断面像の變化多き事は宮本博士の既述の如くである。同博士によれば本横断面像を次の五型に分つ事が出来る。

(Ⅰ)宮本博士現代日本人第四圖版、♂第1號♀第7號例の如く前縁平坦その兩端は角をなし後走す。内縁は前半部輕く陷凹し後半は輕く膨滿するも後縁は鈍隆し俯手筋櫛の突出は顯著

俯手筋櫛の突出は比較的弱い。

(Ⅲ)同♂第13號、♀第3號例に見るが如く前縁の外端のなす角の鈍なるもの。

(Ⅵ)♂第24號例に見る如く前縁内角は強く突出し、ために同縁は陷凹し、同時に内縁の陷凹も顯著となる。

同表によると男女左右いづれの場合に於ても、第一型最大頻度をなすも、第二位に来るものは場合によりて型を異にし、男性にては第三型、女性及び左側にては第二型右側にては第四型である。其結果全體としては第二型第二位に來り、第三第四兩型は同一頻度をとりて第三位になる。不規則型は一例をも見ない。之れを宮本博士の現代日本人と比較すると第八表の如くなる。

第 八 表

	n	I	II	III	IV	V
♂ { 樺 日	30 60	14 31	6 11	6 8	4 8	0 2
♀ { ♀ ♀	23 40	16 27	3 3	1 10	3 0	0 0
r { ♀ ♀	26 50	15 28	3 8	3 11	5 3	0 0
l { ♀ ♀	27 50	15 30	6 6	4 7	2 5	0 2
T { ♀ ♀	53 100	30 58	9 14	7 18	7 8	0 2

左表を見るに第一型がいづれの場合に於ても第一位に來ることは兩人種に共通である。然るに第二位の頻度を有するものは兩人種に於いて男女反對の關係にあり。左右差は現代日本人に見ず。全體としては樺太アイヌ人の第二型に對して、現代日本人は第三型が第二位を占め、第二型は第三位に落ちる。但し各型頻度値は兩人種間に大差がない。たゞ第四型頻度は現代日本人に比して樺太アイヌ人に比較的大である。

2、尺骨々間橈最強部横断面

宮本博士に従つて本横断面を次の四型に分つ。

(I) 不正三角形をなし骨間橈強く突出せるもの(宮本氏、現代日本人第五圖版♂第6號、♀第7號)其掌側面は軽く凹み内側面は凸出す。而して背側面は内側面同様に廣くして之れも淺凹する。

(II) 宮本博士現代日本人第五圖版♂第19號、♀第6號の如く背側面は掌側面に比して稍々狭く長拇伸筋附着部は廣くして強く矢狀方向に向ひ、背面は一の角を有し、ために全體として本横断面形は三角形と云はんよりは寧ろ不正四角形に近い。

(III) 宮本氏第五圖版♂第12號、♀第14號の如く横断面正三角形に近きもの。

(IV) 同♂左第25號、♀左第5號の如く背側面の角型弱く骨間橈の鋭きもの。

本材料に就いて以上四型の頻度を表示せば第九表の如くなる。

第 九 表

	n	I	II	III	IV
♂ { r l	14 16	9 6	2 4	2 3	1 2
♀ { r l	12 12	8 9	1 2	2 0	1 1

左表によれば男女兩側を通じて第一型最も多く之れに次いで第二型が多い。但し男性右側にては第二型と第三型は同一、女性右側に於いては第三型が第二位に來る。之を宮本氏の成績と比較すると第十表を得る。

次表を見るに各型頻度の順位は全體としては兩人種共に I・II・III・VI の順序を取るも樺太アイヌ人に於ては右側にては僅か1例乍ら二型は三型よりも多く、左側に於ては三型、四型同一頻度となる。然るに現代日本人に於ては各場合同一關係にあつて樺太アイヌ人に見る如き現象を證し得ない。各型の頻度に就ては一般に樺太アイヌ人は現代日本人に比して第二型少く、第一型及び第四型の頻度が稍々著し

第 十 表

	n	I	II	III	IV
♂ { 樺 日	30 60	15 29	6 18	5 9	4 4
♀ { 〃 〃	24 40	17 22	3 11	2 4	2 3
r { 〃 〃	26 50	17 24	3 14	4 8	2 4
l { 〃 〃	23 50	15 27	6 15	3 5	3 4
T { 〃 〃	54 100	32 51	10 29	7 13	6 7

第 十 一 表

	n	I	II	III	IV
♂ { r l 〃	12 11	9 5	1 4	1 1	1 1
♀ { r l 〃	9 9	6 7	1 1	1 0	1 1

第 十 二 表

	n	I	II	III	IV
♂ { 樺 日	23 60	14 30	5 15	2 8	2 7
♀ { 〃 〃	18 40	13 22	2 11	1 4	2 3
r { 〃 〃	21 50	15 24	2 15	2 7	2 4
l { 〃 〃	20 50	12 28	5 11	1 5	2 6
T { 〃 〃	41 100	27 52	7 26	3 12	4 10

い。第三型に至つては兩者略同一關係にある。

3、尺骨中央部横断面

尺骨中央部横断面は尺骨の骨間櫛最強部横断面と殆んど大差なく、宮本氏に従ひ後者の型式分類法を利用して之れを分てば樺太アイヌ人に於ては第十一表の如き成績を得る。

即ち各型頻度の關係は前項の夫れと大差なきも全體として第四型が第三型よりも一例多い。之れを宮本氏の現代日本人の成績と比較するに第十二表の如くなる。

之れによれば各型頻度の順位に於いて樺太アイヌ人は第四型第三位に、第三型第四位に來る點に於て現代日本人左側の例と同一關係を示すも全體としては後者に比して第三型の頻度少きことを示し、頻度値より云へば一般に第一型は樺太アイヌ人は比較的多く第二型は比較的少い。是等の點は骨間櫛最強部横断面の場合と同一であり、之れを要するに樺太アイヌ人は骨間櫛の發達強きもの現代日本人に比して比較的多く、長伸拇筋附着部の隆起の強きものが比較的少數である。

第五章 掌 骨

掌骨中央部横断面

宮本氏は現代日本人材料に於いて第一掌骨中

央部横断面は殆んど毎常蛤貝形をなしその尖端は下方(掌側方)を指す、と記されたが樺太アイヌ人材料に於てもまた同一事實を見る。但し本材料中女性第626號右側に見るが如く掌方に向ふ尖端を缺ぎ、全形は瓜實形をなすもの、又男性第622號右側例の如く外側面の陷凹著しく、外端尖鋭にして千鳥形をなすものは宮本氏例中にも絶無ではない。故に今同氏の原著について之れらの例外形の頻度を求め、併せて本材料の夫れを比較するに第十三表の如き關係を得る。但し第一型は蛤貝形、第二型は瓜實形、第三型は千鳥形を示す。

之れを以つて見るに樺太アイヌ人に於ては第二、第三型の頻度現代日本人に比して比較的高きものと認めなければならない。

第十三表

	n	I	II	III
♂ { 樺 日	12 60	9 59	1 1	2 0
♀ { 〃 〃	4 40	3 37	1 2	0 1
r { 〃 〃	10 50	7 46	2 3	1 1
l { 〃 〃	6 50	5 50	0 0	1 0
T { 〃 〃	16 100	12 96	2 3	2 1

第二掌骨と第三掌骨との關係は宮本氏の現代日本人に於いては後者は前者に比して横断面比較的圓く、大さは兩者同大なるも男性にては前者が後者よりも大なる場合多しと云ふ。然るに樺太アイヌ人にては兩者併存せる18例に於て掌側面の尖銳は寧ろ第二掌骨に比し第三掌骨に強く、大さも前者に比して後者の大なるものが多い。而して兩者共に一般に掌側面の尖銳は現代日本人に比して、より著しき傾向がある。第五掌骨横断面の變化多き事及び一般に特に女性に於いて之れが第四掌骨の夫れより

りも大なる事は現代日本人の成績と同様である。

結 論

以上樺太アイヌ人上肢骨各種横断面圖の特徴を記載し、主として宮本氏の現代日本人の成績と比較して得たる結論を簡単に再述すれば次の如くなる。

(一) 鎖骨

樺太アイヌ人の鎖骨中央横断面圖47(♂34, ♀13)は宮本博士の所謂不規則型最も多く、卵圓形之れに亞ぎ、圓形は最少である。又現代日本人に比しては卵圓型、不規則型著しく多く圓型、横楕圓型の頻度は著しく小である。

(二) 上膊骨

樺太アイヌ人の上膊骨中央部横断面圖65(♂41, ♀24)は宮本氏の所謂楔狀型最も多く、鈍四角型之れに亞ぎ、半月型及び不規則型は最少である。現代日本人に比しては所謂中間型は比較的頻度大、半月型は少々頻度小である。

(三) 橈骨

樺太アイヌ人の橈骨々間櫛最强部横断面圖53(♂29, ♀24)は宮本博士の所謂三角型最大頻度を占め、瓶子狀、栗實狀のもの略同一頻度をもつて之に亞ぎ、不規則型は一例をも認めない。現代日本人の成績に比較して三角型頻度の著しく大なる事を特徴とする。此點に於いて樺太アイヌ人は現代日本人に比し、より原始的性狀を示す。

(四) 尺骨

樺太アイヌ人尺骨の上部横断面圖53(♂30, ♀23)は宮本博士の所謂第一型最も多く、第二型之れに亞ぎ、不規則型は一例をも見ない。現代日本人に比し各型頻度値は大差なきも第二型、第三型頻度は少々前者に大なるものゝ如くである。

尺骨々間櫛最强部横断面圖54(♂29, ♀25)は宮本氏の所謂第一型最も多く、第二型之に亞ぎ、第四型

は最少である。之頻度の順位は現代日本人の夫れと同一であるが、後者に比して前者は第一及び第四型の頻度が少々著しきものと如くである。

尺骨中央部横断面圖41(♂23, ♀18)は宮本氏の第一型最も多く、他は比較的少い。現代日本人に比して第一型比較的多く、第二型は比較的少い。之を要するに尺骨中央部に於ける骨間櫛の發達強きものは現代日本人に比して樺太アイヌ人に比較的多く、長伸拇筋附着部の強く發育せるものは後者に比較的少數である。

(五)掌骨中央部横断面圖96(♂58, ♀38)

第一掌骨横断面を三型に分つて頻度を比較するに、第一型(宮本氏の所謂蛤貝型)最も多く、他の二型は僅少である。但し後二者の頻度は余が宮本氏材料より得たる現代日本人の成績に比しては比較的大である。第二以下の掌骨に於いても一般に後者に比し樺太アイヌ人掌骨は掌側の尖鋭強き感がある。

擱筆に臨み恩師清野教授の御校閲を深謝する。

主 要 文 献

1. ADACHI, B., Die Orbita und die Hauptmasse des Schädels der Japaner und die Methode der Orbitalmessung. Zschr. Morph. Anthropol., Bd. 7, S. 379, 1904.
2. FISCHER, E., Die Variationen an Radius und Ulna des Menschen. Zschr. Morph. Anthropol., Bd. 9, S. 147, 1906.
3. HASEBE, K., Study upon the Human Bones found at Kô in the second Excavation. Report Archaeol. Research. Kyoto Imp. Univ. Vol. 4, p. 35, 1919-1920.
4. HRDLIČKA, A., Typical Forms of Shaft of long Bones (Abstract) Proc. of the Assoc. of Amer. Anat. 14. cit. nach Fischer, E.
5. 平井, 樺太アイヌ人骨の人類學的研究, 第一部, (頭蓋骨の研究), 人類學雜誌, 第四二卷附録, 昭和二年十一月.
6. KOGANEI, Y., Über die in dem japanischen Muschelhügel gefundenen Skelette. Mitt. med. Ges. Tokio. Bd. 4, S. 1239, 1888.
7. MIYAKE, H., Anthropologische Untersuchungen über das Skelett der Chinesen; I, Humerus. Mitt. med. Ges. Südmandschurei, Bd. 10, S. 260, 1922. II, Vorderarmknochen. Mitt. med. Ges. Südmandschurei. Bd. 12, S. 572, 1924.
8. MIYAMOTO, H., Morphologische Untersuchungen über die Querschnitt der Röhrenknochen der rezenten Japaner, I. Morphologische Untersuchung über die Querschnitte der oberen Extremität, Act. Schol. Med. Univ. Imper. in Kioto. Vol. 7, S. 553, 1925.
9. SUZUKI, B., On the Human Skeletons found at Kô, Kawachi and at Todoroki, Higo. Report Archaeol. Research, Kyoto Imp. Univ., Vol. 2, 1918.
10. 關, 樺太アイヌ人骨の人類學的研究, 第二部 (上肢骨の研究), 人類學雜誌, 第四五卷, 第七附録, 昭和五年十月.

Taf. 1. Querschnitte durch die Mitte der Clavicula (Nat. Grösse).

Taf. 2. Querschnitte durch die Mitte des Humerus (Nat. Grösse).

Taf. 3. Querschnitte des Radius an der Stelle, wo die Crista am stärksten entwickelt ist (Nat. Grösse).

Taf. 4. Querschnitte durch die Mitte der Ulna (Nat. Grösse).

Taf. 5. Querschnitte der Ulna an der Stelle, wo die Crista interossea am stärksten entwickelt ist (Nat. Grösse).

Taf. 6. Querschnitte der Ulna unmittelbar unter der Incisura
radialis (Nat. Grösse). ♂

Taf. 7. Querschnitte durch die Mitte der Ossa metacarpalia (Nat. Grösse).